

資本主義の次に来るのは どんな世界か —「脱成長」と「崩壊学」をヒントに—

2024年10月10日(木)

第43回縮小社会研究会 19:00~20:30

農業ジャーナリスト 吉田 太郎

自己紹介～農業の原点は茨城県

- 筑波大学自然学類卒
- 同学大学院地球科学研究科中退
- 日本は工業立国→基盤は資源
- 地球科学(地下資源)を専攻
- フィールド・福島県八茎鉱山
- 掘り尽くすと資源は枯渇する
- 廃坑と夏の青い草の香り
- 1985年に循環型産業に関心→魚住道郎さん他各農場訪問
- 金子美登氏の下で有機農業を修業→つくばで百姓仕事
- 農業土木→埼玉県(土地改良)
- 東京都農政担当
- 長野県で有機農業推進担当





クローズアップ現代
2024年3月4日で長野
県松川町が優良事例と
して紹介

記事 | **有機給食で**
子どもも町も笑顔に

美→つくばで百姓仕事

- 農業土木→埼玉県(土地改良)
- 東京都農政担当
- 長野県で有機農業推進担当





0 崩壊学&脱成長

崩壊学からローカル主権
 脱成長から生まれる自由

脱成長と食と幸福
 センジュー・ラトカーシュ
 中野浩之訳

資本主義の次に来る世界
 THE NEXT WORLD
 小島信之

なぜ、脱成長なのか
 斎藤幸平

少ないほうが豊かである
 斎藤幸平

LIMITS
 脱成長から生まれる自由
 道格拉斯・エンゲルハート

Humanity
 希望の歴史
 ルトガー・ブレグマン

THE ECOTECHNIC FUTURE
 小島信之

THE LONG DESCENT
 John Michael Greer

THE WEALTH OF NATURE
 ECONOMIC & SURVIVAL MATTERED
 John Michael Greer

1 今日、お話ししたいこと

①崩壊学からローカル主権
 ②崩壊学の説明
 ③資本主義の仕掛けの説明
 ④人間は善人
 エコテクな未来とローカル

4℃の上昇で沿岸都市は水没

崩壊学3章

- 2050年に2℃上昇するのを回避する必要条件からすでに逸脱→2100年には平均4.8℃の上昇に達するとの予想^[2p61]
- 2℃上昇する世界でもインドでは生産が25%減少→かってない飢餓→ Bangladeshでは600万人が住む南部の3分の1が文字通り水没^[2p66]
- 多くの難民が発生するためインドでは、いま Bangladeshとの国境3,000mにわたって2.5mのバリア建設に着手^[2p62]
- カナダの軍事評論家グウィン・ダイヤー(1943年～)は著書『地球温暖化戦争』(2009)新潮社で2036年にインドとパキスタンでは核戦争が勃発すると予想^[2p66]
- 平均4℃上昇する世界では海面上昇が1mに達し、沿岸の大都市は水没し、主なデルタ地帯では農業もできなくなる→1世紀以内に地球の平均気温は16℃、大陸部では10℃、極地では30℃上昇^[2p63]
- 地球の大半は生物にとって棲息できる状況ではなくなり、人類の発汗でさえ体温を37℃に維持することが不可能^[2p69]→文明が維持できない

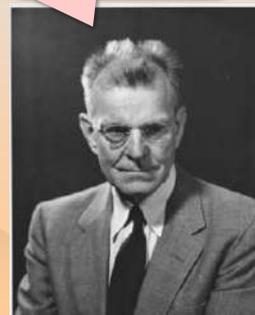


スピード狂もガス欠寸前

崩壊学2章

- 指数関数的な増加には限界がある^[2p37]
- この状況を著者であるパブロ・セルヴィーニユとラファエル・ステイーヴンスは、加速し続けている自動車に例える^[2p37,2p115]
- 文明でいうガソリンタンクとは、化石燃料や鉱石等の再生不能なストック資源と再生可能だが再生が間に合わないペースで消耗されるフロー資源からなる。そして、エンジンがどれだけ高性能になっても燃料が不足すれば自動車は走れない^[2p38]
- 国際エネルギー機関は、石油埋蔵量に関しては楽観的な評価を下す団体なのだが、この団体でさえ、石油生産の80%を占める在来型の石油の生産は2006年にピークを越えたと2010年に発表^[2p42]
- オイルシェールのような非在来型石油も助けにはならない→国際エネルギー機関の楽観的な評価でも総燃料生産の6%
- バイオ燃料も今後10～15年間に供給される量は全体の5%以上にはならず逆に食料の安全保障を脅かす^[2p46]
- これは、たやすく石油が入手できた時代が終わったことを意味する^[2p43]

世界は1956年に米国の地質学者、マリオン・キング・ハバート(1903～1989年)が提起した「ピーク」に直面することになった^[p41]



ソーラー風力発電も地下資源に依存

崩壊学2章

- 風力発電の製造には銀が欠かせないし、電池にはリチウムが必要→2010年のクリストファー・クルーグソンの報告によれば、88種類の再生不能資源が2030年には恒久的に欠乏状態になると算定している[2p47]
- 産業文明の生命線である化石エネルギーも物質が入手できなくなる事態は切迫していて、いまのところ来るべき枯渇に対処できる代替案もなにもない[2p48]
- 世界で現在必要とされている電力量は約14テラワットだが、2017年の世界銀行のレポートによれば、必要な電力のためのソーラー、風力発電施設を建設するには、480億トン以上の鉄、1億6,200万トンのアルミニウム、5,000トンの亜鉛、4,000万トンの鉛、3,400万トンの銅が必要である。風力発電のタービンに必要な磁石の成分、ネオジムやソーラーパネルの主原料である銀、インジウムの必要であれば、蓄電するためのバッテリーだけでも4,000万トンのリチウムが必要
- 自動車も同様に2019年のイギリスのレポートによれば、世界中にある20億台のガソリン車を電気自動車に切り替えるには、銅、コバルト、ネオジム、が必要となる[7p148]



アグリテックの幻想に騙されるな

補足説明

- スミルによれば、現代社会はイノベーションに取りつかれている
- 寿命が100歳を楽に超えて、人間の脳とAIとが融合して意識が共有され、ソーラーエネルギーも無料で利用できるようになるとされている[3p329]
- これからの世界は、化石燃料の依存から脱却して再生可能エネルギーへと転換していけると言われればそう思うってしまう。自動運転の電気自動車、3Dプリンターを利用した心臓や腎臓の作製といったものが近いうちに利用できると吹き込まれると、つい信じてしまう[3p320]。けれども、低コストでの核融合、惑星の地球化計画等、いずれも眉唾物だ[3p298]
- スミルによれば、最新の近代技術の進展は、マイクロプロセッサと電波という二つの大発見に派生しているにすぎない[3p290]
- トランジスターを微細化するスピードが倍になったからといって、それは科学技術の進歩全般の指標にはならない→食料の生産や荷物の輸送に関しては進歩のペースが遅い。現代生活はこうしたゆったりしたペースで進歩する様々なプロセスにも依存[3p321]

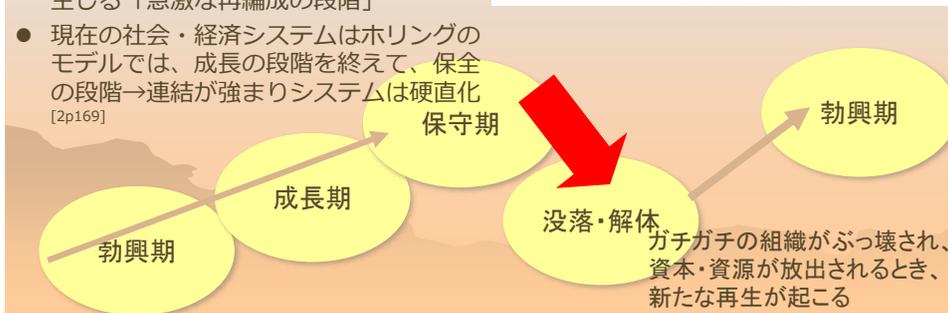
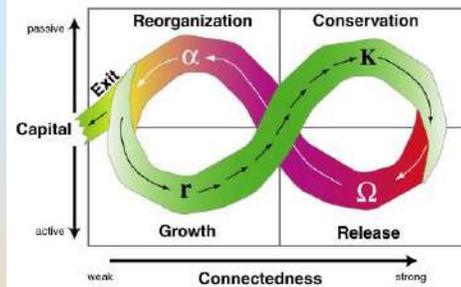


マニトバ大学
パーツラフ・スミル (1940年
～) 特別荣誉教授

崩壊学9章

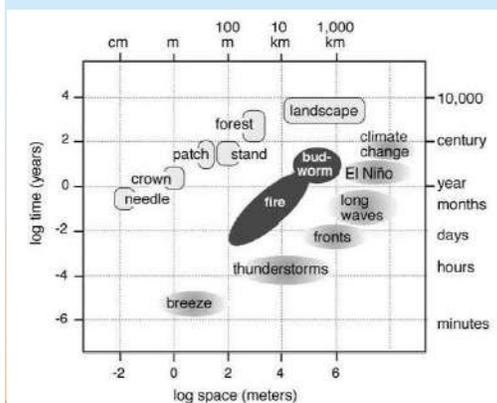
勝ち組は永遠ではない

- 1970年代に生態系のレジリエンスを研究していたカナダの生態学者、フロリダ州立大学のバズ・ホリング(1930～2019年)名誉教授は、サイクル理論を提唱→すべての社会・生態系システムは、実際には安定も均衡もしてはいない
- システムがエネルギーと物質を蓄積する「成長の段階」、システムが連結して硬直化して脆弱化する「保全の段階」、崩壊または衰えの段階そして、別の成長が生じる「急激な再編成の段階」
- 現在の社会・経済システムはホリングのモデルでは、成長の段階を終えて、保全の段階→連結が強まりシステムは硬直化 [2p169]



森林の極相は永遠ではない

諸行無常



フロリダ大学クロフォード・スタンリー・「バズ」・ホリング (Crawford Stanley "Buzz" Holling, 1930～2019年) 教授

崩壊の三つのシナリオ

崩壊学7章

- メリーランド大学のサファ・モート准教授ら、数学者、社会学者、生態学者からなる学際的なチームは2014年に「HANDY=Human and Nature Dynamics」→架空文明での人口動態をシミュレーションするモデル^[2p140]
- 米国の経済学者、コロンビア大学のジョセフ・スティグリッツ(1943年～)教授は、格差は人々の信頼を根底から失わせ、フラストレーションを高め、政治や行政への信頼をなし崩しにする。結果として、選挙での棄権率が増え、それによってさらに富裕層の公的機関への支配が強まると警告^[2p144]

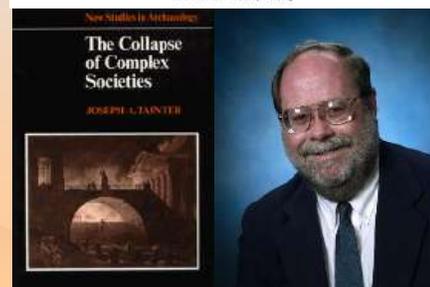
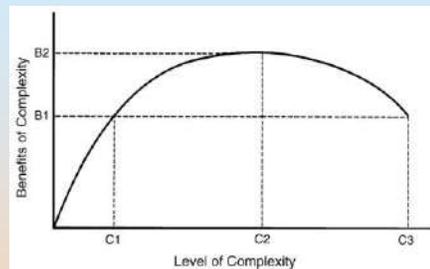


A仮説 平等な社会から出発	消費が過剰にならないければ、社会は環境とバランス消費を増やすと人口が増えて崩壊 ^[2p141]
B仮説 少数の非労働者+大多数の労働者 & 富がきちんと分配される社会から出発	消費が少なく成長が遅い以外は、社会は混乱、衰退、あるいは崩壊
C仮説 エリート層が富を独占する不平等な社会	エリート層が大衆を犠牲にして資源を独占→大衆が衰退し崩壊 ^[p142] →マヤ文明→人口が崩壊後に自然は回復 不平等な社会で資源も大量消費 ^[2p142] →メソポタミア文明→文明崩壊後も資源は枯渇したまま ^[2p143]

文明が崩壊するわけ

崩壊学9章

- ジョセフ・テインター教授は政治的機能が不全となる理由を制度が複雑化するために代謝コストが高くなるためだと熱力学的に説明する。資源やエネルギーが複雑さを維持できなくなれば、社会は長期にわたって単純化する。その事例が、ローマ帝国が崩壊した以降の中世である^[2p164]
- 1988年『複雑な社会の崩壊(The Collapse of Complex Societies)』
- 複雑さにはコストがかかり、複雑さになればなるほど、もっとコストがかかる
- このコストはエネルギーのフローによって支払われる
- 結果として複雑な社会は崩壊



崩壊の6つの段階

崩壊学9章

ドミートリー・オルロフ(1962年～)博士は旧ソ連の崩壊を事例に崩壊は、金融、経済、政治、社会、文化と5段階で進行すると説明する[2p166]



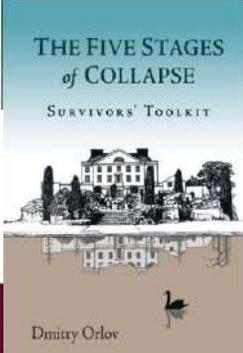
②経済の崩壊	頼みの綱である「市場がなんとかしてくれる」という希望が消えることから、経済の崩壊が始まる 供給チェーンは断絶し、必需品の欠乏が通常化 貿易取引も減少し、経済は徐々に複雑ではなくなっていく	1990年代のキューバ 輸入が減少→物々交換、リサイクル、修理業、古道具商等の非公式経済が爆発的に発展 政府は価格管理や配給政策 コミュニティで基本となる必需品をまかなう術が役立つ
③政治の崩壊	頼みの綱である「政府が面倒をみてくれる」という希望が消えることから、政治の崩壊が始まる 政府の経済政策は失敗し、政治家は合法性と正当性を失う。政府は秩序を維持するため、外出禁止や戒厳令を発動[2p167]	ゴミ収集等公的サービスは確保されず、ゴミも収集されなくなる 米国や先進国の大半では、もはやここまでの3段階は避けられない[2p168] 旧ソ連邦も第3段階の政治的な崩壊にまでは至ったが、社会の消滅にまでは至らなかった[2p166]
④社会の崩壊	頼みの綱である「仲間が面倒をみてくれる」という希望が消えることから、社会の崩壊が始まる 慈善団体他の社会集団も資金を使い果たして破綻するか内紛で頓挫	人々は自己中心の世界に突入り、氏族で固まり、内戦が始まる→紛争、栄養不良、感染症等が蔓延し、人口は減少に転じる→まだ、 信頼で結ばれた小さなコミュニティに属して助け合いを基本とすることが役立つ

崩壊の6つの段階

崩壊学9章

ドミートリー・オルロフ(1962年～)博士は旧ソ連の崩壊を事例に崩壊は、金融、経済、政治、社会、文化と5段階で進行すると説明する[2p166]



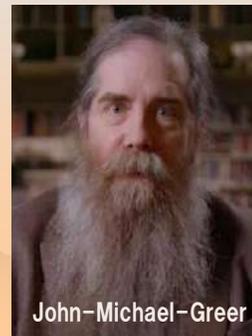
⑤文化の崩壊	「人々の善意への信仰が失われ、人々が本来持つ優しさ、寛大さ、配慮、愛情、誠実さ、もてなしの心、思いやり、慈悲心を失ってしまう」と文化の崩壊が始まる 他人と一体となることはますます難しくなり、感情移入の能力も失われ、一般に言われる人間味も失われる	残念ながら社会科学はこの特別な状況をほとんど研究していない ウガンダのイク族は「完全なる個人主義」→死にかけた家族にさえも食物を分け与えることを一切しない
⑥自然の崩壊	オルロフ博士は2013年に崩壊の第6ステージを加えた。それは生態系が崩壊した段階で、生態系が枯渇した社会の再生は不可能とは言わないまでも可能性は非常に低い[2p169]	 

楽観的脱成長より

崩壊学9章

グレアの段階的崩壊論が現実的

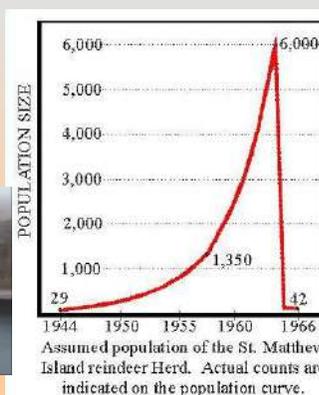
- 線形の衰退モデルは非現実的な仮説→経済が段階的に制御できる範囲で低成長となり、人々が行動を根本的に変える大規模なトランジションへの時間的な可能性が残される→脱成長派が描く最も楽天的なシナリオだが^[2p170]、歴史的に見ればあまり現実味がない^[2p160]
- パーマカルチャーのロブ・ホプキンス(1968年～)が提唱する「トランジション」も世紀末や虚無主義的ではない未来をイメージするうえで貴重だが、地政学的な紛争、社会の緊張、苦しみや死といった負の部分をおまりに無視^[2p161]
- 振動形の衰退モデルは、未来学の作家、ジョン・マイケル・グリア(1962年～)が提案する「カタボリズム=異化作用」的崩壊
- 最初のモデルよりはよほど現実的で、社会が順応するための活動幅も残っている。これが現在、いちばんの希望で、あとはそれを実施するかどうか^[2p170]
- 例外的に「進歩」に取り残された「半周辺地域」はアグロエコロジーで生き残れる^[2p171]



John-Michael-Greer

オーバーシュート

- 米国海岸警備隊が1944年に29頭のトナカイを食料源としてベーリング海のセント・マシュー島に導入
- トナカイの天敵がおらず、何百年もかけて生育した苔を食料源に1963年までにトナカイは6,000頭まで増殖
- 食料源である地衣を食べ尽くすと、ピークとなった3年後にたった42頭にまで激減

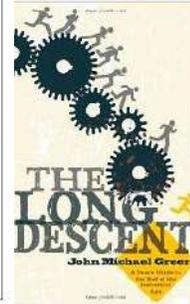
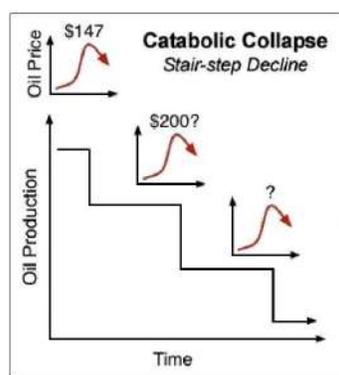
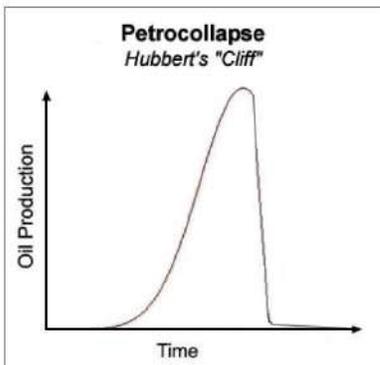


ワシントン州立大学のウィリアム・コットン名誉教授(1926年～)

長き没落

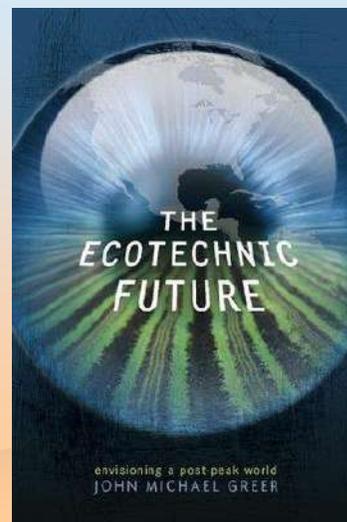


- ジョセフ・テイターの崩壊論を掘り下げ
- ローマは崩壊したが、中国は崩壊と帝国化で循環
- カタストロフィーではなく緩やかな没落



エコテクな未来

- 石油時代は終わる
- グローバル化は終わる
- 情報、金融等の仕事は不要
- 農業と職人が中心
- サルベージ計画
- 近代文明の遺産を生かす



エコタウンよりもサルベージ

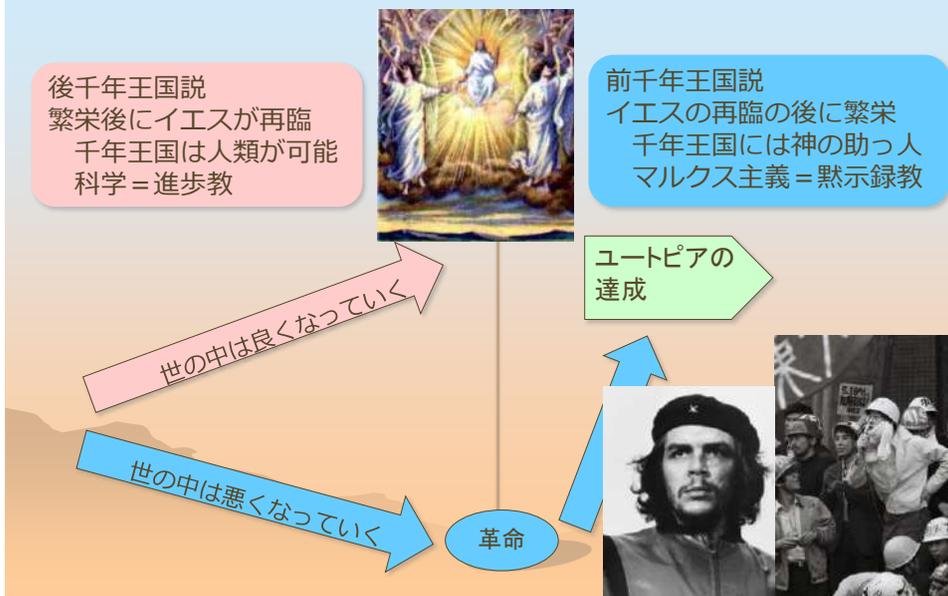


線形の時間の流れ

キリスト教	エデン	原罪		プロレタリアートの再臨	千年至福王国		
マルクス	原始共産制	私有財産の発明	奴隷制	封建制	資本主義	社会主義	共産主義
ロストウ	第1段階: 伝統的 社会	農業生産時代		第2段階	第3段階: 離陸 (テイクオフ)	第4段階: 成熟化	第5段階: 高度大量消費

一方的に流れていく時間の流れ=成長

キリスト教が産んだ進歩と黙示録



2

崩壊学の前半まとめ

- ① 気候危機、多様性喪失と地球環境は限界
- ② 資源が枯渇する中で成長
- ③ オルロフの5段階説
- ④ グリアの段階崩壊



閉塞社会で誰もが他律奴隷に

崩壊学4章

- 温暖化に反対し、脱炭素の世界を目指す闘いに参加する市民はフランスでは数千万人VS石油関連の多国籍企業やその協力者は約10万人
- 組織化され、膨大な資金を所有→2013年での総投資額は224億ユーロ(約3兆円)^[2p91]。
- 金融システムと化石燃料をベースとしたエネルギーシステムと経済成長はセット^[2p93]。
- 政治も同じで、目先の選択をするように方向づけられていて、自由度がほとんどない^[2p95]。
- 至るところにある「ロックイン」でグローバル経済は収縮できない→システムに依存し人々も極めて「他律的(自律の反対)」→自ら、接続を遮断し、自律的な世界を見つける能力がない^[2p95]。
- 支配的なシステムの内部で解決策は見いだせない→トランジションはシステムの周辺で行わなければならない^[2p96]。

金融機関と政府との関係は非常に密接で、いくつかの金融機関や多国籍企業は「大きすぎて潰せない(too big to fail)」、「大きすぎて訴訟できない(too big to jail)」状態になっています

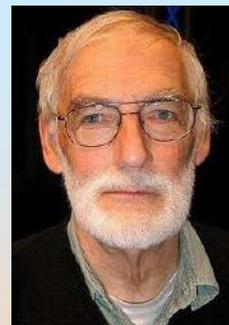


ミラノ大学
ステファニア・ビタリ博士

すでに手遅れ=生き残り

崩壊学5章

- 崩壊を避けるために手を打つべき時はすでに過ぎてしまった→ニューハンプシャー大学のデニス・メドウズ名誉教授は2013年にこう悲観的に述べている。
- 「持続可能な開発を目指すにはもう遅すぎる。今後は衝撃に耐え、早急にレジリアンスのある小規模なシステムを構築しなければならない」^[2p153]
- パーマカルチャーの共同発案者、デヴィッド・ホルムグレン(1955年～)は30年以上も前からピークオイルを懸念^[2p211]→ピークオイルがそれほど早く来ないことを嘆いて、一刻も早い切断を提案^[2p212]
- 2013年に気候変動の影響を不安視し、生物圏への甚大な被害を避ける唯一の出口は、グローバル化した経済システムの徹底的な破壊を引き起こすしかない^[2p212]
- ホルムグレンによれば、先進国の国民10%が貨幣制度を離れて、地域のレジリアンス運動に全面的に参加すれば、現在の経済システムは崩壊を免れない域まで縮小するという。ある種のシステムのボイコットで、この提案は世界中の崩壊論者の中で大論争を呼んでいる^[2p212]

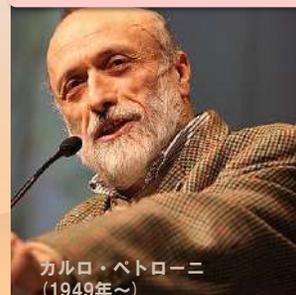


脱成長→崩壊学→SF

脱成長と食と幸福

- 2001年に脱成長運動が台頭したとき、メディアの評論家の多くはこの運動をユートピア思想だとしてこき下ろした^[8p135]→文明崩壊は幻想であって「何も手を打つ必要がない」^[8p136]
- 2010年代後半になってからは、マスメディアの流行は危機否定論から、パブロ・セルヴィーニユ、ラファエル・スティーブンス、イブ・コシエ(1946年～)らの「崩壊学」にシフト^[8p135,注8p33]
- もはや手を打つ術がなく、いまさら脱成長を夢見るのは手遅れ^[8p136]→文明崩壊後の世界におけるローカルなサバイバル・シナリオが構想^[注8p33]→脱成長が推奨するシステムチェンジに関する議論は隘路に陥っている^[8p135]
- 脱成長のメッセージは急進的だ。生活習慣の大部分を問直しで多くの人々は躊躇→スローフードは食の画一化に対して、風味豊かで健全な食生活という穏健な提案を打ち出す→世界中の数十万という生産者、小規模農家、職人、漁師たちがスローフード運動に参加^[8p99]

テッラ・マードレ(Terra Madre)は2004年にカルロ・ペトリーニが設立したスローフード運動の姉妹団体→スローフード運動が先進国を中心→伝統農業・漁業従事者をネットワーク化→ノウハウや課題の共有化と国際的連帯の促進を目指し、スローフードの関心を食料生産や小規模生産者まで拡大^[p97,注p32]



カルロ・ペトリーニ
(1949年～)

3

崩壊学の結論は地方自治

- ①もはや手遅れ→辺境が鍵
- ②奴隷化されシステムに依存→自立することが重要
- ③脱成長は人気がなく崩壊学
- ④食とスローフードは人気



秩序崩壊で人間は利他的に 崩壊学10章

- 現在の支配的な文化のストーリー→テクノロジーや競争、弱肉強食、進歩を目指した断固とした前進^[2p190]→社会秩序が消滅するとあっという間に混乱に陥り、利己主義が蔓延し、戦争が起こる
- 現実とは違う→作家、レベッカ・ソルニット(1961年～)が『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』(2010)亜紀書房→第二次大戦中の爆撃、世界中で起きた洪水や地震、暴風雨に直面した人々の行動を社会学的に研究→人々は利他的に行動し助け合う^[2p185]
- ニューオーリンズや神戸を調べたイリノイ大学のロバート・オルシャンスキー名誉教授の研究→建物は崩壊しても人材は残り、社会ネットワークはよりレジリエンスがある^[2p187]
- 作家、ジャック・ルコント(1955年～)が2014年の著作「人間的な優しさ、利他主義、共感、寛大さ(La bonte humaine. Altruisme, empathie, generosite)」で描くように、多くの研究や観察から否定→この分野は崩壊学で最も急を要する研究^[2p188]



レベッカ・ソルニット



ジャック・ルコント

イースター島は人類の希望

- イースター島の物語は、ジャレド・ダイヤモンド教授のベストセラー→閉じられた世界が生んだ悲惨な未来絵図
- ブレグマンは次の圧倒的な事実をもとに、木を伐採し尽くし共食いにまで至った悲惨な島民という事実はなかったと実証
 - ① 島民が飢えて部族間で戦いあった考古学的な証拠はない
 - ② ポリネシアからイースター島に上陸後に人口が増えたとしても2,200人で飢餓で人口が減った根拠すら怪しい
 - ③ 森林が減ったのは伐採ではなくカヌーで持ち込まれた齧歯類が原因
 - ④ ただし、樹木が減った後もアグロエコロジー的な農業技術を用いたことから島の農業は豊かだ→イースター島の物語は希望の物語
- 「最後の木がなくなったときに島民は農業のあり方を見直し、新たな技術を開発して収量を大幅に増やしたのだ。イースター島は避けられない破滅の物語ではなく希望が湧いてくる物語なのだ」^[5p177]

希望の歴史

医者から深刻な副作用があると警告された薬を飲めば、本当にそうなる。これをノセボ効果と呼ぶ^[5p30]。明らかに人間は天使ではない。人間は複雑な生物で良い面もあれば悪い面もある。けれども、人間について肯定的な見方を誰もが信じるようになれば、それはいっそう真実になる^[5p31]。だからこそ、人間について新しい見方をすべきだ^[5p44]

ジャレド・ダイヤモンド
(1937年～)

人類の本性は善である

- 2000年に、ハーバード大学の人類学者、ジョセフ・ヘンリック(1968年～)教授らは、12カ国の15の農民、遊牧民、狩猟民、採集民を対象に、本当にホモ・エコノミクスが実在するのかどうかを初めて調査→ホモ・エコノミクスと呼ぶには、誰もがあまりにも善良で優しい[5p40]
- 2005年にハリケーン・カトリーナ→映画等で描かれるのとは逆に、災害があっても無政府状態にはならない。人々は利己主義に走ることなく落ち着いて利他的な行動→災害はむしろ人々の善良さを引き出す。この社会学的な発見には数多くの堅牢な証拠[5p26]
- カナダの人類学者、トロント大学のリチャード・リー(1937年～)名誉教授によれば、カラハリ砂漠のクン族はプライドが高く自慢する人間を危険視[5p131]→偉そうにするリーダーはお払い箱に[5p133]
- 備蓄と貯蔵も狩猟採集民の間ではタブーとされ、誰とでもわかちおうとしてきた。もちろん、公正な分配を嫌う人間はいるが、傲慢すぎたり貪欲すぎたりする人間は追放[5p131]

希望の歴史



所有で格差と奴隷国家が誕生

- 人類は氷期の中で人々は生きのびるために団結→誰かが「ここは自分の土地だ」と言うことを思いつく→所有の始まりは不平等の拡大を意味する→貧富の格差拡大[5p136]→1万年前に私有財産が蓄えられるようになってから、農民と戦士、都市と国家からなる新たな世界が誕生 [5p54, 5p63]。
- 最終氷期が終わったのと同時に最初の戦争→考古学からも定住をしはじめた時期に最初の軍事要塞が築かれたことが判明[5p136]
- 見知らぬ相手と闘うために戦場で活躍したカリスマ性のあるリーダーが登場し、地位が固まり、平時にも権力を手放さなくなっていく [5p137]
- 定住と私有財産の出現で、人類史に新しい時代→口先のうまい人間が指揮官から将軍へ、首長から王へと出世→人類の自由、平等、友愛の日々は終焉した[5p138]。
- イェール大学のジェームズ・スコット(1936～2024年)教授によれば、メソポタミアのウルクやファラオが支配したエジプト等、最初に生まれた国家は例外なく奴隷国家[5p146]

希望の歴史



権力者ほど恥知らず

- カリフォルニア大学バークレー校のダッカー・ケルトナー(1962年～)教授は、ニコロ・マキャヴェッリ(1469～1527年)のの主張が本当に正しいのかどうかを寄宿舍やサマーキャンプで実験で確認→旧石器時代と同じで、最も親切で共感力のある人が好まれ、『君主論』が指示するとおりに行動する人は嫌われてキャンプから追い出された^[5p42]
- しかし、高級車のメルセデスを与えられた被験者の45%は停止せず^[5p43]→高級車になるほど運転マナーが乱暴に^[5p44]
- 脳のある領域が損傷するとマキャヴェリアンのような反社会的な人格になる^[5p44]→先天的な社会病質社(ソシオパス)=恥を感じることができない人は狩猟採集民の中では長くは生きられないが、現在の複雑な社会では有利→一般の人々の中では1%しかいないが、CEOでは4～8%もいる^[5p59,5p264]
- 自分の嘘がばれていることを知りながら、平然と嘘を重ねることもできる^[5p59]。階級社会の中でトップに立つのは、友好的で共感力のあるリーダーではなく、その正反対の恥をしらない人間^[5p60]

希望の歴史



コモンズ破壊=資本主義

脱成長と食と幸福 ポスト資本主義

- 1500年代から1700年代にかけて実質賃金は70%も落ち込み→栄養状態は悪化し、飢餓が蔓延し、ヨーロッパ史上、最悪の飢餓
- エンクロージャーで自給自足経済は破綻→トマス・ボップスは1651年に自然状態の人生を「卑劣で、残酷で、短い」→ボップスが描写した悲惨さは資本主義の台頭によってもたらされた^[7p55]
- 近代の経済論理は、簡素な暮らしを評価せず、儉朴な人々のイメージを惨めな人々に変えたが、それは、16世紀にイギリスで始まったコモンズの搾取の結果
- すべての人間に対して無償で与えられる潤沢な自然の恵みを収奪することで、「希少性」と「豊かさ」という恐ろしい対概念とともに世界の経済学化が生み出された
- 現代のエンクロージャーは、水の民営化と生物の商品化として進められている。自然界が無償で再生産されてしまえば、モンサント社は利潤が得られない^[8p75]。そこで、節度ある豊かな社会を構築する必要がある^[8p68,8p91,8p128]



豊かなりし中世・自治

ポスト資本主義

- ペスト→封建制の崩壊→自由農民は自給自足を原則とする平等で協働的な社会を築き始める
- 地代は下がり、食料は安くなり、栄養状態は改善→賃金のレベルはほとんどの地域で2~3倍となり、6倍となるケースもあった。女性の賃金も上昇し、男女の賃金差も縮まった^[7p50]
- 農民たちの労働時間は天候や季節、祭りや祝祭日に左右矢印必要なだけ働くと残りの時間はダンスをしたり談笑をしたりビールを飲んだり、楽しむことに費やされていた^[7p78]
- ボストン大学の社会学者、ジュリエット・ショア(1955年~)教授によれば、中世のイギリスでは1年の3分の1が休日、フランスでは日曜日が52日、安息日が90日、38日が祝祭日で、スペインでは1年のうち5カ月が休暇^[1p142,7p78]
- 1350年代は自由農民は土地を直接管理する権利を勝ち取る→彼らは民主的な集会を開き、森林、放牧、耕作に関するきめ細かなルールを定め、牧草地やコモンズを集団で管理した。ヨーロッパの土壌は回復しはじめ、森林も再生^[7p51]



モノを捨てて成長

脱成長と食と幸福

- 携帯電話は平均18カ月の使用で廃棄される。2002年に米国では1億3,000万台以上の使用可能な携帯電話が廃棄^[8p131]
- 経済学者のベルナルド・マリは「セールスマンと広告業者のあらゆる活動は、製品で飽和状態の世界の中でニーズを新たに創出することを使命としている。そのためには製品モデルチェンジと消費の速度を加速させなければならない」
- 消費社会が持続するには、広告、クレジット、そして、計画的廃棄が必要→米国の最大手企業のCEOに対して実施したアンケート調査によれば、広告キャンペーンなくしては新商品の販売は不可能だと回答した経営責任者は90%→生態系に対しては正真正銘の「犯罪の源」^[8p137]



経済の原動力は不幸

脱成長と食と幸福

- 経済成長は近代のプログラム→経済成長と大量消費は最大多数の最大幸福をもたらすためだが目的を果たせず^[8p37]→トリクル・ダウンは神話→栄光の30年という例外的な時期を除いて一度として機能せず^[注8p9]
- グローバル化の進展とともにトリクル・アップ^[8p41]
- 貪欲と競争に基づく社会の原動力は不幸^[8p44]
- 先進社会は価値の喪失と質の低下の上に成り立つ→「使い捨て」の加速化は、大量の商品をゴミに変え、使用済みの人間は排除されたり解雇^[8p43]
- 少数の勝ち組以外は大量の敗者→苛立ち、嫉妬、羨望
- 少数の勝者もその地位が必然的に不安定なので不安に駆り立てられている^[8p44]

フラストレーションの増加率は生産の増加率を上回る^[8p41]



イヴァン・イリヤ (1926~2002年)

コモンズ=欲望の抑制

脱成長

- 西洋からの伐採者はもちろん、保護主義者も森林資源は乏しいとの前提に立つ。伐採者は貴重な木々をコントロールしたが、保護主義者は希少動物をコントロールしたが、両者の行動のイデオロギー的な基盤となっているのは、いずれも希少性という認識^[4p81]
- 民族誌学者、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのジェローム・ルイス准教授「それが、森林の囲い込み、産業化、資本主義化を牽引している」^[4p81]
- エコロジカル・フットプリント^[4p104]やブラネタリー・バウンダリー^[4p105]、自然を生態系サービスは一見無害そうな言葉だが^[4p102]、それは「限界を持った地球」というマルサスのビジョンを再生産^[4p105]
- 環境の限界は囲い込みを認めるが^[4p157]、現実のコモンズを調査してみれば^[4p158]、インディアナ大学のエノリア・オストロム(1933~2012年)教授が見出したように、コモンズの利用者たちはコミュニケーションを交わしながら資源の利用を制約しあっている^[4p160]
- 限りある資源をわかちあうために、構成員が自己規制しあうことが「コモンズ」の理論の本質^[4p158]



コモンズ=欲望の抑制

脱成長

- 西洋からの伐採者はもちろん、保護主義者も森林資源は乏しいとの前提に立つ。伐採者は貴重な木々をコントロールしたが、保護主義者は希少動物をコントロールしたが。両者の行動のイデオロギー的な基盤となっているのは、いずれも希少性という認識 [4p81]



- 「マルサスー希少性ー経済学ー限界がある中での無限の欲望」
- 「ギリシア・狩猟採集民ー豊饒性ー脱成長ー限界がない中で足るを知る」

わししながら資源の利用を制約しあっている [4p160]

- 限りある資源をわかちあうために、構成員が自己規制しあうことが「コモンズ」の理論の本質 [4p158]



使用価値から交換価値へ

ポスト資本主義

- 資本主義は「使用価値」ではなく「交換価値」を中心としたシステムで、商品の大半は人々のニーズを満たすことではなく利益を蓄積するために生産される。それどころか、往々にして人々のニーズをあえて満たさないようにして需要を持続させようとする [7p212]
- ローダーデール伯爵(1759~1839年)は、1804年に「私富」と「公富(コモンズ)」とには負の創価があり、「私富」の増加は「公富」の犠牲のうえにのみ成り立ち、現在のGDPと呼ばれる私有財産の総額を増やすには、豊富にある無料のモノを利用する権利を人々から奪う必要があると指摘 [7p67]
- 労働時間が短くなり、公共の図書館、公園、スポーツ施設が充実すれば、人々は環境への負荷を最小限に抑えながら豊かな時間をすごせる [7p233]
- ローダーデールのパラドックスを覆すことができる [7p233]



資本主義は豊かな状況では作動しない [7p238]



4 人間の本性は善人

- ① 狩猟採集民は格差を嫌う
- ② モノの所有が格差
→ 奴隷国家
→ 恥知らずが権力者に
- ③ エンクロージャー
- ④ 資本主義は特異な価値観



科学的に幸せが解明

- メリーランド大学のハーマン・デイリー(1938～2022年)名誉教授→「真の進歩指標(GPI)」→ある一定の閾を超えると経済成長のコストの方が便益よりも大きくなる[8p41,7p183]。
- イェール大学のロバート・E・レーン(1917～2017年)名誉教授→生活の物質的水準が向上しても、基本的な人間関係の実質的な衰退によって、米国民の実質的な幸福度が低下[8p42]
- 英国のNGOニュー・エコノミクス財団は、主観的幸福度に関するアンケート調査、平均余命、エコロジカル・フットプリントを組み合わせ、ハッピー・プランネット・インデックス(HPI)を毎年刊行[8p42]→2009年はコスタリカが1位、ドミニカ共和国、ジャマイカ、グアテマラが続き、米国は114位[8p43]
- プリンストン大学のダニエル・カーネマン(1934～2024年)名誉教授→所得が増加すると同水準の満足度を維持するために新たな消費が継続的に必要→トレッドミル効果を証明
- ロンドン大学のリチャード・レイヤード(1934年～)名誉教授→満腹感の閾値の分析で同様の結論[注8p9]

脱成長と食と幸福 ポスト資本主義

GDPはあらゆるものを測定する。ただし、人生の中で経験するに値するものは除外される[7p 206,8p39]



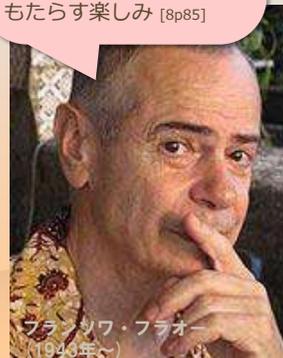
ロバート・ケネディ(1925～1968年)

真の豊かさは金でなし

脱成長と食と幸福 ポスト資本主義

- 経済成長社会は、競争しあい、他者を蹴落としてでも成功し、そして、可能な限りマネーを稼ぐことに価値をおく→経済成長社会のこのプログラムが行き詰まっていて、社会にもっと利他主義や協同を導入し、自然との関係性を修正しなければならないことを多くの人々が理解し始めている[8p73]
- 本当の富は、友人がいて興味あることをして、知的に豊かになったり、自分たちの潜在能力を実現したりすることにある[8p73]
- ベルナル・マリ(1946～2015年)によれば「知識の交換は商品の交換とは根本的に違う。知識の交換においては与える側は何も失わず、受け取る側は相手から知識を得るが奪いはしない」[8p85]
- コミュニティや人とのつながりを感じているときに、人は「自分は有意義な人生を送っている」と感じる→カリフォルニア大学バークレー校のダッチャー・ケルトナー(1962年～)教授「内在的な価値」→消費によって得られる束の間の快感よりも強力で、かつ、長く持続[7p187]

幸せとはお金では買えないから生じる喜びである。具体的には生き生きとした対話、友人に囲まれながらの食事、良質な労働環境、住み心地が良い都市、様々な文化活動への参加、そして、一般的には他者との多様な関係がもたらす楽しみ [8p85]



ベルナル・マリ
(1946年～)

豊かさを知る伝統智

脱成長と食と幸福 ポスト資本主義

- セネガルのNGOの代表、ティエルノ・バ
- →フランス人が開発と呼ぶものを村人は望んではない。村人たちが望んでいるのはフラニ語でのバンターレ
- バンターレとはしっかりと連帯に根づいてコミュニティを通じて調和ある社会的な豊かさを追求すること→コミュニティの各成員は、最も富める者から最も貧しい者まで各自に居場所を見つけ、自己の人格的な実現を達成することが可能
- ボリビアのアイマラ語の「スマ・カマーニャ」、エクアドルの「スマック・カウサイ」はいずれも、母なる大地・自然・生命の循環及びあらゆる形態の存在と調和して均衡を保ちながら生きる意味、すなわち、他者との分かち合いが不可欠との意味[8p51]
- 先住民では互恵主義が重要な原則であって、ポタワトミ族の科学者、ニューヨーク州立大学のロビン・ウォール・キマラー(1953年～)教授は、生物界から食物や資源を受け取る際には、祖母から手作りの料理をもらうような思いやりと礼儀正しさと感謝の念をもって受け取るべきだと指摘[7p284]



ロビン・ウォール・キマラー教授
(1953年～)

自己制御の知恵

脱成長と食と幸福

- ヴァン・イリイチ→コンヴィヴィアルな道具を使って喜びと均衡を見つける人間を「節制的な人」と呼ぶ^[8p179]
- コルネリウス・カストリディス(1922~1997年)が提唱する「自己制御」の実践にも通じる^[8p129,8p180]
- イランの思想家、マジード・ラーネマ(1924~2015年)は、イリイチのコンヴィヴィアリティとスピノザの「力能」の思想を重ね合わせて考えている^[8p182]
- セルジュ・ラトゥーシュも開発や消費社会の他律的な権力に回収されない自立共生的な「力能」をコモンズに生きる儉朴な人々の中に見出している^[8p182]
- 伝統的な簡素な生活様式はあらゆる社会においてプラスの価値を持っていた^[8p72]。あらゆる人間社会は自然界の成長サイクルに畏敬の念を払っていた^[8p105]



コルネリウス・カストリディス



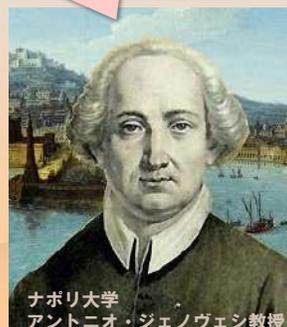
マジード・ラーネマ(1924~2015年)

個の幸せより皆の幸せ

脱成長と食と幸福

- 英語の「ハピネス」は主観的な幸福感として認知^[注8p9]
- フランス語の「幸せ(ボヌール)」も公共の幸せを志向する点で個人主義の克服を意味する
- 市民的経済学は、アリストテレス主義の伝統によって育まれた経済思想→18世紀までイタリアに存在^[8p46]
- ナポリ大学のアントニオ・ジェノヴェシ(1713~1769年)教授のナポリ啓蒙主義によれば、イタリア語の「幸せ(フェリチッタ)」は、なによりも公共の幸せのことをさす→個人主義的な繁栄よりも君主による「公正な統治」による集合的な至福^[8p20]
- 西洋社会以外のすべての人間社会は、スピノザの言う「悲しい情念(野心、貪欲、妬み、恨み、エゴイズム)を抑制しようとし、大なり小なり成功→人類史の中でただ一つこれを解き放った社会がアングロ・サクソンでの西洋社会^[8p31]

他者を幸せにせずして我々が幸せになることなどありえない。これは宇宙の法則である
[p47]



ナポリ大学
アントニオ・ジェノヴェシ教授

5

5
自発的に足るを知る

① 経済=不幸を前提

② 幸せの科学的根拠が解明

③ 自発的に足るを知る

④ 伝統智を学び直す

⑤ イタリアの伝統



脱成長を達成するための戦略

あえて壊れる製品を長く使い続ける

- 電化製品の寿命を25年まで伸ばす技術はすでに存在→洗濯機やスマートフォンが4倍も長持ちすれば消費量は75%は減る→人々の暮らしにも悪影響がないどころか、無駄な出費から解放され暮らしの質は向上[7p215]

無駄なものを買わせる広告を規制

- 1990年になされた調査によれば、米国のCEOの90%が広告キャンペーンなしに新製品を売ることは不可能[7p216]
- 衣服を例に取れば、現在、米国人は1980年代の5倍も衣服を購入しているが[7p217]、ファストファッションを規制するだけで生地量を80%も削減できることになる[7p218]

皆でモノをシェアする

- 所有権を使用権に移し、1台の機器を10家族で共有するだけでその製品への需要を10分の1にでき、人は時間と金銭を節約→公共交通機関は電気自動車よりも効率的なのである[7p219]

格差を減らし、公共財を脱商品化し、コモンズを拡大

- 公共サービスを脱商品化し、コモンズを拡大し、労働時間を短縮し、格差を減らせば、贅沢な消費が減り、競争心に由来する消費も減る[7p231,7p237]

生態系を破壊する産業を規制、フードロスをなくす

- 農業からの排出量は世界合計の26%を占める[注7p21]。すでにフランスとイタリアではスーパーの食品廃棄を防ぐための法律を制定[7p221]

地産地消の農業等エッセンシャルワークでは雇用を保障する

- 米国の労働時間を西ヨーロッパの水準に減らすだけでエネルギー消費量は20%も減る→労働時間の短縮は最も即効性・効果的な気候対策[7p227]

脱成長




ジェイソン・ボンケル 教授

脱成長を達成するための5戦略

脱成長

鍵となるのはコモンズのネットワーク

- 貨幣経済は実のところ氷山のほんの小さな一角にすぎない。幅広いボランティア活動、互恵活動、非営利活動に支えられてこそ貨幣経済は成っている[4p85]
- 名もなきコモンズが成長を指さない経済を再構築していく基盤となる[4p86]
- 米国の活動家、デヴィッド・ボイアー(1955年～)は、コモンズという概念には私有化や民営化の勢力を跳ね返す可能性がある」と主張[4p73]

公的サービスからコモンズを復権する

- もともと売り物ではなかったものを商品化し、公的サービスであったものを民営化ことの逆をする[4p109]

万人にベーシックな所得とサービスを保障

- 市場原理主義的ではない経済への移行行期に全員に一定の衣食住が確保[4p108]
- 雇用が環境保護かの二者択一を超えて、地球を守りながら暮らしを営むことが可能に[4p107,4p108]

アグロエコロジーやCSA等、環境と平等のための公的支出

- 環境を破壊する活動や社会を破壊する不平等に課税で抑制[4p117]。肉中心の食文化から脱却し、食品ロスを削減するために食品流通システムを改善し、アグロエコロジーやCSA等、より生活に根差した政策で生態系の活性化とローカル経済の復興[4p121]
- 所得に上限を設定することで「足るを知る」精神を世の常識に[4p118]



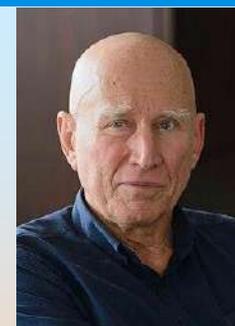
ヨルゴス・カゲス教授



自然は急速に回復

ポスト資本主義

- ブラジルの写真家、セバスチャン・セルガド(1944年～)は1990年代後半、写真報道家としてのキャリアに挫折し、幼少期に過ごした故郷の農村に戻る
- 集約的な畜産と森林破壊のためかつての生物と水にあふれていた楽園は変貌し、不毛で乾き切った荒れ地に→セルガド夫妻は1999年に、熱帯林の再生と言う誰もが無理だと思う挑戦に挑む[7p253]
- 6年後の2004年には1730エーカーの荒れ地は緑に覆われ、2012年には森林は回復し、泉が再び湧きだし、鳥、哺乳類、両生類、そして、数種の絶滅危惧種も戻って来た[7p254]
- 2016年、ワーヘニング大学のローレンス・ポーター教授らの研究によれば、生態系が原生林のバイオマスの90%を回復するには平均で60年しかかからないことが判明した。コスタリカでも家畜の放牧のため破壊された熱帯林は21年で再生した。生物多様性の回復にはさらに歳月がかかるが30年で原生林のレベルにまで回復した事例もある。人類が過剰な産業活動を縮小すれば、生物界は驚くべき速さで回復する[7p254]



コンヴィヴィアリティ

脱成長と食と幸福

- シンプル・リビング運動は個人でのライフスタイルの変革を掲げるが、脱開発学派は、経済から抜け出すことを目指す^[8p56]
- 西洋での「良い生活を送る」という概念は、利潤の追求、個人主義、他者への無関心と類義語で自然と人間の搾取を含意するが、良き生は良き社会と結びついている→善き社会とは、生存手段を与えるのではなく、まずなによりも生きる意味を与える社会^[8p52]→幸せ・良き生を「連帯的な社会における節度ある豊かさ」と再定義できる^[8p53]
- オルタナティブな社会を構築するには、欲求と商品の際限なき創造という悪循環から抜け出し、個人主義の結果生じたエゴイズムを治癒することが必要^[p55]→自己制御によって節度ある豊かさには到達し、贈与の精神の再生と自立共生(コンヴィヴィアリティ)を促進することによって実現^[8p56]
- コンヴィヴィアルな社会は社会的排除を生み出さない^[8p59]



ガストロノミー=自立共生

脱成長と食と幸福

- ガストロノミーは古代ギリシア語の「gastronomia」に由来するフランス語で「胃袋の法則」の意味^{[8]註p31}→自然誌、物理学、農学、医学、政治経済学のすべてを包摂する学問分野→スローフードのカルロ・ペトリーニによれば「食べる」という行為は、農的な行為、さらに、政治的かつ医学的な行為にもなる^[8p93]
- ペトリーニによれば「ガストロノミー」という言葉が「美食」という意味を持つようになったのは→フランス革命後にブルジョア階級を中心に貴族階級の食文化にあこがれたため→本来のガストロノミーは貧しい農民階級の創意工夫によって発明された料理法→自立共生的な食文化を意味^{[8]註p31}
- まっとうで洗練された料理によって質が高い食生活を楽しむ技法であって、禁欲的な料理でも饗宴のような料理でもない。エピクロス主義に対する通俗的で歪んだイメージではなく、エピクロス(前341年頃～前270年頃)本来の哲学に言及することが重要^[8p7]
- 「コンヴィヴィアリティ」は美食家、ブリア=サヴァランが使った言葉^[8p86]→イヴァン・イリイチが引用^[8p97]

あなたが何を食べているか試してみなさい。あなたがどんな人か当ててみよう



ブリア=サヴァラン
(1755~1826年)

6 ガストロノミーを切り口に

①脱成長の戦略
コモンズ、労働時間短縮
所得保障、価値ある仕事

②自然共生農業で自然再生

③個人よりも社会運動

④コンヴィヴィアリティ



トランジションか独裁か？

崩壊学10章

- 個人主義はエネルギーが潤沢にある社会だけが手に出来る贅沢→エネルギーが不足する時代になれば、個人主義が一番先に死ぬ。協力的な行動を示す能力を持つ集団がより生き延びられるチャンス^[2p188]
- エネルギー不足でいずれ助け合いの時代に入る→参加型、自主管理型、自治管理型の民主主義の実験はトランジションのネットワークには役立つ^[2p215]
- 1990年代、**キューバでアグロエコロジー**へのトランジションの成功例^[2p212]
- 現在の民主主義とされているものは、実際には寡頭制のオリガーキー
- 現在のモデルを守るために躍起となって、成長再推進政策を取れば、大惨事は早まる^[2p215]
- 年金が支払われず、食料不足が深刻化すれば、国民の怒りが高まり、社会の混乱が増大すればそれに付け込んだファシズムが台頭→深刻な経済危機が穏やかで平和なトランジションをもたらす保証は何もない^[2p215]
- 過度の成長推進は、我々全員を「石器時代」に戻す^[2p223]



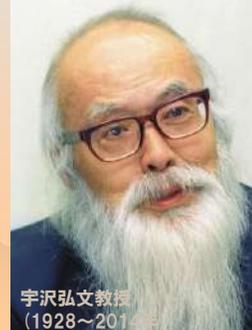
日本は世界の流れに遅れた

脱成長

- 欧米圏では、オレゴン大学の社会学者、ジョン・ベラミ・フォスター(1953年～)教授によって2000年からエコ社会主義が再発見^[6p211]
- 日本では公害問題とのつながりから、1980年代に都留重人(1912～2006年)、宮本憲一(1930年～)らによってエコ社会主義的な活動が盛ん→日本のマルクス研究は欧米よりも進んでいたことから、日本の左派はフォスター教授らの議論を見過ごす^[6p212]
- 欧米圏ではCSAや生協運動が21世紀の仕組みとして脚光^[6p213]
- 日本では農業への危機感から、1970年代から産消提携の仕組みが発達^[6p212]→1980年代には全国的に隆盛したが現在は低迷→いまの若者との交流もなく、欧米の最近の実践や運動と断絶^[6p213]
- 欧米圏では、コルネリウス・カストリアディス(1922～1977年)、アンドレ・ゴルツ(1923～2007年)、イバン・イリイチ(1926～2002年)等が再評価
- 宇沢弘文(1928～2014年)、玉野井芳郎(1918～1985年)、槌田敦(1933年～)、室田武(1943～2019年)、多辺田政弘(1949年～)等を評価すべき^[6p214]



ジョン・ベラミ・フォスター教授
(1953年～)



宇沢弘文教授
(1928～2014年)

日本こそ最先端・社会運動を

脱成長

- ヨルゴス・カリス教授が言う「自律」とはただ闇雲に我慢することではない^[6p207]
- 極端な自然回帰や^[6p216] 地方に完全移住したり完全自給自足の暮らしに切り替え、自らの限界内に留まる生活を選択できる人は特権的な立場^[6p217]
- 限界内で自分の暮らしを留められるかどうかは社会の構造に依存^[6p217,6p218]→ユニバーサル・ケア・インカム等、格差をなくすためのシステム転換が必要^[6p217]
- 無限の成長欲求の制限は日本では仏教や禅による禁欲的な暮らしがイメージされがち^[6p216]
- 互いが互いを監視しあう五人組のような息苦しさ^[6p219]に陥りがち
- 「となりのトトロ」や「風の谷のナウシカ」のようなジブリ作品に描かれる風景や世界観の方が違う豊かさがあることが読者にイメージしやすい
- 海外からみれば、日本こそ節度を知り、質素さを美しいと感じる精神を持つ文化としてのイメージが強い。数十年も経済成長をしていない日本にこそ脱成長のヒントがある(小林舞特定助教)^[6p216]

斎藤幸平氏とFEASTとのクリストフ・ルプレヒト、田村典江、太田和彦、小林舞の対談
FEASTとは、ステイブン・マックグリービー、真貝理香らがメンバーである脱成長に取り組むアジアにおける持続可能なフードシステムへの転換を支援する一般社団法人



脱成長

日本こそ最先端・社会運動を

- ヨルゴス・カリス教授が言う「自律」とはただ闇雲に我慢することではない^[6p207]
- 極端な自然回帰や^[6p216] 地方に完全移住したり完全自給自足の暮らしに切り替え、自らの限界内に留まる生活を選択できる人は特権的な立場^[6p217]
- 限界内で自分の暮らしを留められるかどうかは社会の構造に依存^[6p217,6p218]→ユニバーサル・ケア・インカム等、格差をなくすためのシステム転換が必要^[6p217]
- 無限の成長欲求の制限は日本では仏教や禅による禁欲的な暮らしがイメージされがち^[6p216]
- 互いが互いを監視しあう五人組のような息苦しさに陥りがち^[6p219]
- 「となりのトトロ」や「風の谷のナウシカ」のようなジブリ作品に描かれる風景や世界観の方が違う豊かさがあることが読者にイメージしやすい
- 海外からみれば、日本こそ節度を知り、質素さを美しいと感じる精神を持つ文化としてのイメージが強い。数十年も経済成長をしていない日本にこそ脱成長のヒントがある(小林舞特定助教)^[6p216]

齋藤幸平氏とFEASTとのクリストフ・ルプレヒト、田村典江、太田和彦、小林舞との対談
FEASTとは、スティーブン・マックグリービー、真貝理香らがメンバーである脱成長に取り組むアジアにおける持続可能なフードシステムへの転換を支援する一般社団法人






来日2023年11月→2024年 有機給食/Renerative Agriculture、京都草喰なかひがし、 石見银山、群言堂・松場登美

WE ARE WHAT WE EAT



食べることは生きること ～アリス・ウォータースのおいしい革命～

監修・撮影・編集：田中晴生 プロデューサー：長谷川ミチ子、原中頼弘、飯沼智子、小野寺由
出演：アリス・ウォータース、高橋大輔、山本浩二、ヒュー・ロス・オグデン、レベッカ・キングス、津野真実、
ジロウ・カネコ、中野真由、島崎真由、志保、アリス・ウォータース、ユキオ・カネコ、
制作：Jem 制作：新上の城、子船、みずゆき、キタケイコ、山本浩二
配信：ユビ（オンラインストア） 65分/日本2024年11月10日
© 2024 Jem (株) All Rights Reserved. / Arise No Kasei

快樂主義=節度を知る

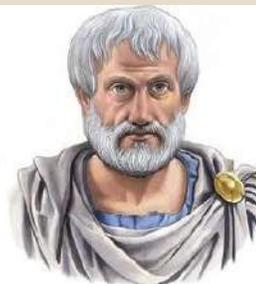
脱成長と食と幸福

脱成長

- コンヴィヴィアリティは、まさに経済の恐怖によって引き裂かれた社会関係を紡ぎ直すことを意^[8p59]
- 一般に幸せはモノがあふれた生活を連想させ、簡素な生活と関連づけられることはない。簡素に生きることは、欲望を内発的に制御することで、ある種の**快樂主義**(ヘドニズム)やわかちあい(コンヴィヴィアリティ)を否定することではない^[8p7]
- 古代ギリシア人たちは何かを度を越して手にすることで限界を逸脱してしまう「傲慢(ヒュプリス)」という観念^[6p123]
- キリスト教→してはならないことを二分法で明確に規定し罪→ギリシア人は、貨幣への欲望やセックス、アルコール、食べ物への快樂を求める欲望そのものを責めたりはしない→良い欲望と悪い欲望とを区別せず^[6p128]
- 快樂主義を主張するキュレネ派の開祖、アリストIPPoS(紀元前435年頃～紀元前355年頃)は「最善なのは快樂を断つことではなく、それに打ち負かされることなく抑え込むことである」→ギリシアでは哲学者と医師の双方が、規則正しい食事と運動を薦め、適切な性行為の時期についての手引書→それは、過剰を避けて節度を備えた生活をおくるためのアートを論じた文章だった^[6p129]

ソロンの金言はデルフォイの信託所に刻み込まれた。

「何事も度を過ぎることなかれ(メーデン・アガン)」^[6p125]



崩壊学は死と直結する

崩壊学10章

- 崩壊学では米国の心理学者、エリザベス・キューブラー=ロス(1926～2004年)が確立した死の受容のモデル(①否認、②怒り、③取引、④憂鬱、⑤受容)の段階が必要→崩壊を認めず否認してはは一步も進めない^[2p203]
- 文明の崩壊を受容するところから、再び行動の意欲と人生への意味を見出せる^[2p204]
- 限界に対する人間の恐れは、死への恐れと関連→死とは究極的な限界だから^[6p135]
- 死が究極の恐れで限界であることから、現代文化は死の隠蔽に執着^[2p137]→ハリウッド映画の筋書きは、次々と襲ってくる死の脅威を主人公は乗り越え永遠に幸せになりましたというだけで終る^[2p138]→現代人は死を抑圧し、死を拒否する中で、暴力を通じてや他者に死を転嫁することでしか死に対応をできない^[2p140]
- 古代ギリシア人は自分の命にしがみついて、自然が定めた期間を遅らせようと試みる者を諫めた^[2p138]→課せられた限界の中で生を有益で幸せなものにしようとしていた^[2p139]



脱成長

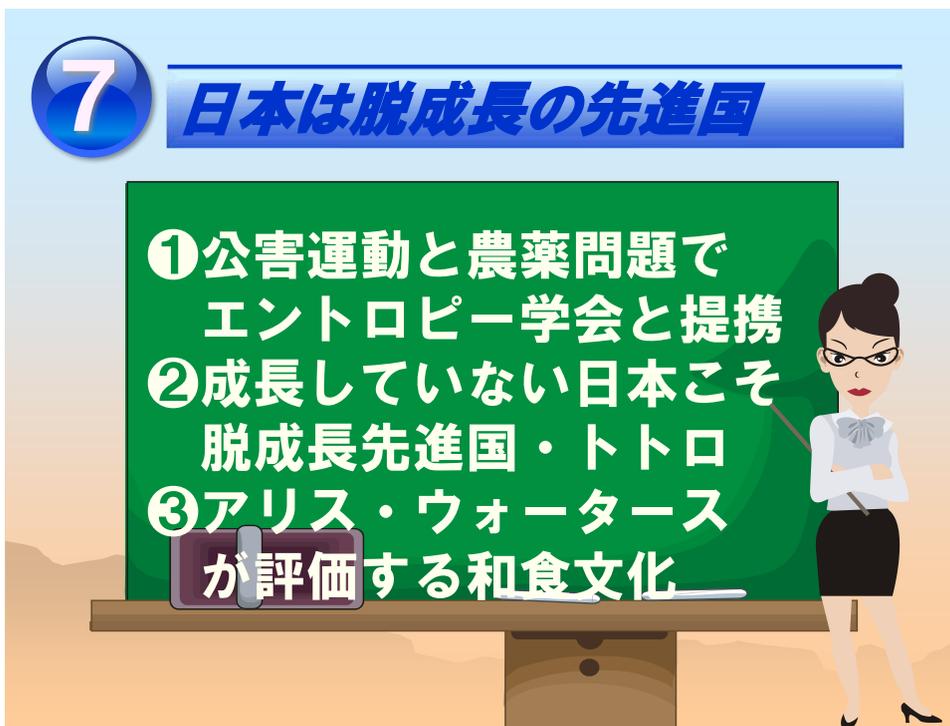


7 **日本は脱成長の先進国**

①公害運動と農薬問題で
エントロピー学会と提携

②成長していない日本こそ
脱成長先進国・トトロ

③アリス・ウォータース
が評価する和食文化

An illustration of a female teacher with glasses, wearing a white blouse and a black skirt, standing next to a green chalkboard. The chalkboard contains three numbered points in white text. The background is a light blue sky and a light brown ground.

引用文献

- [1] ルトガー・ブレグマン『隷属なき道』(2017)文藝春秋
- [2] パブロ・セルヴィーニュ・ラファエル・スティーヴンス『崩壊学』(2019)草志社
- [3] バーツラフ・シュミル『世界のリアルは「数字」でつかめ!』(2021)NHK出版
- [4] ヨルゴス・カリス他『なぜ、脱成長なのか』(2021)NHK出版
- [5] ルトガー・ブレグマン『希望の歴史・上』(2021)文藝春秋
- [6] ヨルゴス・カリス『脱成長から生まれる自由』(2022)大月出版
- [7] ジェイソン・ヒッケル『資本主義の次に来る世界』(2023)東洋経済新報
- [8] セルジュ・ラトウーシュ『脱成長と食と幸福』(2023)白水社